

(No. 13)

事例名	村丸ごと生活博物館
地域	熊本県水俣市（越小場地区、大川地区、久木野地区、頭石地区）
実施主体	越小場 村丸ごと生活博物館（代表者 本井 道弘）
活動要約	村にあるもの全てを博物館に見立てて、屋根のない生活の博物館として自然と生産と暮らしをつなぎ新しく力のある地域づくりを行う活動
主な分野	「コミュニティ・ビジネス」・「技能獲得・継承」・「料理」・「観光」
主な関係者	村丸ごと生活博物館 会員 4 地区合計約 100 人
キーワード	村づくり／生活文化／博物館／家庭料理／加工活動／産物販売／民泊

### ■活動のきっかけ・経緯

- ・水俣市では、農林漁村地域に対し、住民と地域が元気になる生活の支援を行おう、また固有の生活文化を磨き後世に残そうと平成 13 年に「水俣市元氣村づくり条例」を制定した。条例に基づき地域の自然・産業・生活文化を守り育てる地域を「村丸ごと生活博物館」として指定した。

### ■活動内容

- ・「村丸ごと生活博物館」とは集落全体を「生活の博物館」と見立て、訪れる人々に対し、歴史的遺産といった珍しいものではなく、地域住民自身が当たり前と思っている普段の生活を訪問者に案内することで地域と住民を元気にしていく仕組みである。生活博物館では、市から認定された「生活学芸員」が地域の案内を、「生活職人」が生活技術の熟練者としてものづくり体験などを担当している。
- ・これらの活動を踏まえ、地域の人々は、荒れていた畑に再び野菜をつくり、村の食材を使った食事の提供を行い、その結果、遊休地や耕作放棄地は少なくなり、地域の景観も昔の姿を取り戻しはじめるようになると共に、地元生産物の食材販売だけでなく加工所もでき、ビジネスも拡大している。
- ・具体的な活動としては、生活の旅の提供（村めぐり、食めぐり、技めぐり）、加工活動、産物販売、農家への民泊が実施されている。

項目	訪問料金
村めぐり (案内)	1～5人まで 5,000円 (6人からは、一人増につき1,000円追加) ※久木野地区のみおひとり様1,000円
食めぐり (家庭料理)	おひとり様 1,500円～2,000円程度
わざめぐり (各種体験)	1～5人まで 5,000円+材料費 (6人からは一人につき1,000円+材料費追加)

<村めぐりの訪問料金>



<生活学芸員による地域の案内>

- ・食めぐりでは、地元の食材を使い昔から伝承されたものや創作した家庭料理のバイキングを楽しめる他に、レシピ集「わが家のまんま」として本にまとめた実用書も販売している。
- ・技めぐりでは、生活技術の熟練者から教わる竹箸やわらじ作りなどの体験を楽しむことができる。



<地元料理のレシピ本>



<技めぐりの足半(あしなか)草履作り体験>

## ■ポイント・工夫している点

- ・立ち上げにあたっては、他の事例視察等には行かないで、自分たちの村の足下を調べ見つけることを先に進め、紹介できるものをみんなで探し見つけることを基本とした。
- ・料理のレシピ本を作成するにあたっては、竹や芋など地元特産の食材を使い丁寧に説明し作者や加工所を明示することで好評であり収入となっている。
- ・住民たちのみでお金をかけずに知恵と労力を出して行い、特に水俣市からの財政支援はなかった。

## ■課題と今後の展開

- ・地区の受け入れ体制、受け入れの流れの確立  
現在案内の申し込みは、水俣市から地区に伝えられ、地区内では代表が窓口となり地域内での調整後に受け入れの可否に連絡することになっているが、案内は仕事や家事の合間に行うために突然の訪問に対応できない状況にある。  
また制度自体に対する視察等も多くあり、指定地区だけでの対応が困難な場合がある。
- ・指定地区内の体制づくり  
指定地区によっては、取組が村全体ではなく一部のものとなっている雰囲気があり、地区内での目的確認や体制整備が必要と思われるため、検討したい。
- ・ビジョン（長期～短期）の設定  
取組を確実なものとするために、市及び各指定地区における取組の現状を把握し長中短期のビジョンを立て、そのビジョンを達成するための手段の実施が必要で今後検討して行きたい。

連絡先	水俣市 産業建設部 農林水産振興課 農業振興係 住所：熊本県水俣市陣内1丁目1-1 電話番号：0966-61-1634 メール：norin@city.minamata.lg.jp
-----	---

(No. 14)

事例名	平野まちぐるみ博物館
地域	大阪市平野区
実施主体	平野の町づくりを考える会、平野郷HOPEゾーン協議会
活動要約	地域住民が地域の歴史や営みを再発見し町づくりにいかす活動
主な分野	「地域活性化」・「町づくり」・「世代間交流」・「学習」
主な関係者	平野の町づくりを考える会（地域の有志、高齢者も多い）
キーワード	まちづくり／まちぐるみ博物館／語り部／HOPEゾーン事業

## ■活動のきっかけ・経緯

- ・「平野」と呼ばれる場所は、大正時代まで「平野郷」（「平野本郷」）と呼ばれていた旧市街。現在の大阪市平野区の中心部に位置する、約1キロ四方の小さな地域であり、「平野まちぐるみ博物館」は、その「平野郷」（「平野本郷」）に存在する。
- ・「平野の町づくりを考える会」は、地区内に始発駅を置いていた南海電鉄平野線が、阪神高速道路と市営地下鉄の延長に伴い廃線となった際に、平野駅舎の保存を求めて行なわれた1980年の住民運動を契機に発足した。しかし駅舎保存は実現せず、「駅舎の葬儀」を行ったが、当時形成された人々の連帯は、その後30年余にわたるまちづくり運動の継続として実を結んでいる。
- ・「平野の町づくりを考える会」では、1993年からミニ博物館運動に取り組み、施設や展示物を整備することを目的とせず、運営者と訪問者とのコミュニケーションを通して、住民自身が楽しみながら、地域の歴史を、市民運動の中で再認識し、地域を再発見し、これからのまちづくりに生かそうと活動している。
- ・「平野の町づくりを考える会」にはその組織と活動理念にユニークな特徴がある。
- ・組織は、「会長なし・会則なし・会費なし」の三原則を掲げ、様々な背景を有する人々が個人の資格で緩やかに連帯するというネットワーク型の形態を維持している。
- ・活動理念は、「『おもしろい』ことを『ええかげん』に『人のフンドシ』でやる」をモットーに、自分たちが本当に興味を持って取り組めるテーマを厳選し、ひとりひとりが持続可能なエネルギー配分で取り組めるようお互いが心掛けている。また、何事も「あきらめない」ことが肝心である。
- ・行政とも常に一定の距離を保ち、住民主体のまちづくりにこだわり続ける「平野の町づくりを考える会」の姿勢には、まちづくりに対する明確な目的意識がある。
- ・時間はかかるが、ひとりひとりが本当に自分の気持ちからまちづくりに参加し続けられるような下地を育てていくのが「平野の町づくりを考える会」の活動の核心的部分で、経済効果をねらった「まちおこし」とは一線を画している。
- ・多くの地域で経済効果をねらった「まちおこし」が失敗する中、「平野の町づくりを考える会」で育まれた地域を核とした人間のつながりは、「まちおこし」的な活動を成功させ、結果的に地域活性化を果たしている。

## ■主な活動内容

### ●平野まちぐるみ博物館

#### (1) 平野音博物館（聞き耳本舗・聞き耳処）

- ・平野の様々な場所に因んだ音を CD や FM 放送を使って聞くことのできる「聞き耳処」が郷内に点在。
- ・訪問者がボタンを押せば、CD が流れるという簡単なしくみで、「今は、聞こえるべき音が聞こえなくなった」と老婦の声で始まり、豆腐屋や子どもが遊ぶ声等も流れてくる。
- ・全興寺内には「聞き耳本舗」があり、聞き耳処全ての音を聞くことができる。

#### (2) 大念仏寺（幽霊博物館、わたの博物館）

- ・日本最初の念仏道場である大念仏寺は浄土系の宗派である融通念仏宗の総本山。年に1度、幽霊博物館にて公開される幽霊の残っていた「亡女の片袖」を見ようと、長蛇の列ができる。
- ・境内には「わたの博物館」も併設。平野は、明治時代に綿業の町として発達した歴史があり、平野区の紋章にも選ばれた。ここでは、わたの花や糸、製品を触れることができるだけでなく、綿花から糸になるまでの工程を実際に体験できる。

#### (3) 平野映像資料館

- ・創業150年になる呉服屋の主人である松村長二郎さん（平野郷HOPEゾーン協議会会長）が、59年にわたり撮り溜めた映像資料や、世界でも珍しい活動幻灯機などの映像機器などを主人自ら紹介してくれる。
- ・昔の映像等をただ見るだけでなく、映像を撮影した頃を思い出しながら、当時のことを語る呉服屋の主人の語りが楽しい。
- ・呉服屋の主人が撮り溜めた映像資料は、映画フィルムにして10kmを超え、店内にあるテレビモニターでは、約60年前の市内の様子が流されていて、訪れる人同士で懐かしみながら、視聴されている。



<語り部は呉服屋主人の松村さん>



<9.5mmの映像フィルム>

#### (4) 全興寺（駄菓子屋さん博物館、昔あそび博物館、街頭紙芝居）

- ・全興寺は聖徳太子によって建てられたとされる寺である。境内には、「駄菓子屋さん博物館」があり、昭和20～30年代頃に駄菓子屋さんに並んでいたお菓子が展示されているほか、パチンコ台の原型

となった木製のパチンコを体験できるなど、昔懐かしい色々な遊びを体験できる。

- ・境内紙芝居：月1回、1日2回のみ境内で紙芝居が実演される。節約が大好きなお爺さんの昔話や時代劇に出てくる丹下左膳の話。手に飴を持った子どもらが大人も交えながら紙芝居を囲む。小さな子どもの反応をみながら、難しい言葉はその都度、簡単な説明をいれながら進める。
- ・昔遊び博物館：江戸時代の町並みが再現された「おも路地」では、ベーゴマと言われる小さなコマで子どもたちが遊んでいる。ほか、紙相撲など懐かしい遊びを親子で楽しむ姿も見られる。



＜お寺の境内で紙芝居＞



＜駄菓子屋さん博物館＞

#### (5) 平野の商店街

- ・平野の商店街には古くから営業する個人商店が今も営業しており、ディスプレイを見ているだけでも楽しめる。

#### (6) がんこ平野郷屋敷（くらしの博物館）

- ・町家を改造して作られた居酒屋「がんこ」。敷地内には、くらしの博物館も併設され、古い什器などが展示されている。季節によっては店の入り口に、鈴虫のかごが置かれ、虫の音に季節を感じることができる。

#### ●平野郷HOPEゾーン事業

- ・HOPEゾーン事業は、大阪市と地域が連携して魅力ある居住地の形成を図るための補助事業である。
- ・「平野郷HOPEゾーン事業」では、平野地区に残る歴史的・文化的環境を伝える地域を事業区域に指定し、ガイドラインに沿った建物の新築や改修などを対象とした「まちなみ修景補助事業」が実施されている<sup>1</sup>。

#### ■展望と課題

- ・平野の地域に継承されてきた暮らし・文化風習・遊び・信仰・産業などを、まちぐるみで守り育てていこうとする町民の意気込みが伝わってくる。
- ・これらの運動を支えているのは元気な高齢者であり、観光客や来街者に対して自分たちの家や界限空

<sup>1</sup> 平野郷HOPEゾーン事業 <http://www.hiranono.com/hope/index.html>

間などを使って自分たちの暮らしや文化を誇りをもって語っているのは、生きた生活アーカイブという感じである。

- ・地域の空間や文物などの展示だけでなく、「語り部」としての町民がいることが、ポイントである。（反面、「がんこ平野郷屋敷」のように器物を展示しているだけでは、ほとんど印象は残らない。）
- ・呉服屋で展示している映像資料館では、個人所蔵の貴重な映像記録（8ミリなど）が、ビデオ、DVDなどに変換されていたが、個人宅に眠るこのような（思い出）映像資料のアーカイブ化は、公的な資金サポートが望まれる。
- ・お寺の境内の紙芝居、ベーゴマ遊びなどでは、多数の子どもたちが参加していたが、それ以外の平野のくらしや文化が次世代にまで継承されてゆくかどうかは、語り部後継者の点で不透明な部分がある。
- ・平野のくらしや文化の世代継承の仕掛けが不可欠であり、若い人は中々来ないので、子どもを集めるイベントをして、母親達を取り込んでいる。
- ・住民本位が基本で、行政はあくまでお手伝いという発想が大切、行政の固い頭を如何に柔らかくするかが絶えず課題である、と松村さんは熱く語る。
- ・平野の町を知ってもらいたいのが、いわゆる観光地にはしたくない。初めから金儲けだと、それは悟られてしまう。
- ・NPO 法人を安定的に運営するため、経済的基盤を今後いかに確立していくかが、最大の課題である。

連絡先	平野郷HOPEゾーン協議会（会長 松村長二郎） 住所；大阪市平野区平野本町 電話：06-6791-0720（平野郷HOPEゾーン協議会事務局） <a href="http://www.hiranono.com/hope/">http://www.hiranono.com/hope/</a> （平野郷HOPEゾーン協議会） <a href="http://www.omoroide.com/em/home_em.html">http://www.omoroide.com/em/home_em.html</a> （平野まちぐるみ博物館）
-----	--